H28年度　研究サマリー

研究会名称	日本長期腹膜透析患者における排液中の各種マーカーとEPSとの関連の縦断的評価研究	
代表者所属	元　神奈川県立汐見台病院	
代表者氏名	川口良人	印

研究方法・結果

4年以上の腹膜透析歴のある患者より、腹膜透析排液と血液を採取し、IL-6, IL-6 レセプター、高感度CRP（血液のみ）を測定した。排液はブドウ糖液のオーバーナイト貯留後のものを採取した。血液透析との併用療法を行っている患者や、血液透析を行いながら腹膜洗浄を行っている患者も対象とした。

全国34施設から、151名の患者登録があり、血液と排液サンプルの解析を行った。
男女比は1：1.2、平均年齢は54.4歳、平均腹膜透析期間は7.9年であった。排液中の平均IL-6は、112.2pg/ml, 血中平均IL-6は14.3pg・ml であり、有意に排液中が高値であったが、両者間に相関は認められなかった。排液中 IL-6 は、腹膜透析期間と弱いながらも有意な正の相関が認められたが（$p<0.01$）、血中 IL-6, 高感度 CRP は透析期間とは相関は認められなかった。また、排液中の IL-6、IL-6 レセプターは腹膜機能検査の D/P Cr 比と有意な正の相関を示した。血液透析併用群においては、排液中 IL-6 は有意に低値を示した。半年以上の経過を終えた症例については、時間的推移を検討したが、排液中の IL-6, IL-6 レセプターは増減したもの様々であり、一定の傾向は認められなかった。

今回、排液中 IL-6 が血中より高値を示したことより、血液中からの移行というより、腹腔内における IL-6 の産生が示唆された。排液中の IL-6 と透析期間の相関は有意ながらも弱かったが、これは、腹膜炎の罹患、使用している透析液の種類などの因子が関係している可能性がある。

以上より、腹膜透析排液中の IL-6 は、腹腔内の状況、特に慢性炎症を反映している可能性があり、腹膜変化の有用なマーカーとなりうるかも知れない。被嚢性腹膜硬化症の診断は、困難なことも多く、排液マーカーが診断や治療経過評価に有用である可能性もあり、さらなる検討が必要である。

研究成果（論文、学会発表、雑誌掲載等）

宮崎正信、中山昌明、川西秀樹ら。Japan Fluid study（JFS）からの報告－長期腹膜透析排液研究からの結果（第2報）－ 臨床透析 2008 389-390

M Miyazaki What predisposes to EPS? From the results of Japan Fluid Study European Peritoneal Dialysis 2007 (Helsinki, Finland)